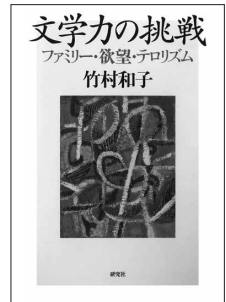


〈特集書評論文〉

文学の力に賭けること ——『文学力の挑戦』は何に挑戦するのか

越智 博美



『文学力の挑戦——ファミリー・欲望・テロリズム』（研究社、2012年。以下、『文学力』と表記）を手にとると、まず、ほとんど奇異とも言える、あるいは直截すぎるそのタイトルそのものに目を惹かれる。「文学力」とは、そして「挑戦」とは何を意味するのだろうか。さらにその副題「ファミリー・欲望・テロリズム」も同様である。これが「文学・表象・政治」ならば（むろん、そうしたタイトルですら、たとえば1970年代には考えつきもしなかったであろうが）、「穏当」なのかもしれないのだが、「欲望」をはさんで「ファミリー」と「テロリズム」が並置されているとは、なんとも剣呑な組み合わせである。竹村和子という文学研究者がこの過激とも言えるタイトル賭けたものは何だったのだろうか。みずからの文学（研究）に賭けた思いとは何だったのだろうか。

そもそも、竹村さんにとって文学を研究し、論文を書くことは、とりもなおさず、みずからに向かい合う、切実かつ苛烈な営為であった。

書くという行為——それはとりもなおさず物語を語る行為——は、わたし自身を解体していく道のりだった……愛についてまとまったものを書くことが、いかに自分と向き合い、自分がある意味で危機に陥れるものか、また自分自身がいかに既存の言語のなかに幾重にも取り込まれている存在なのかに気付いて、愕然とした……おそらく論文であれ小説であれ詩であれ、文章を書くとはそういうものだろう。自身が粉々に碎けるような気がして、恐ろしくて身がすくむ思いがしたこともあった……書き終えてみると、まだまだ書き尽くせないものがあることに気づく。（竹村 2002、p.26）

そして、このような、みずからの立ち位置をつねにみずからに問い続けながらの「書く」作業は、「読む」作業と表裏一体をなすものでもある。『文学力』の最終章、「ある学問のルネサンス？——英（語圏）文学をいま日本で研究すること」において示されるのは、読むこともまた「自身を解体」する営為、別の言い方をすれば、みずからを自明の自分とすることとは正反対にある、「自己の他者化」（竹村 2012、p.323）なのだ。

それにしても、なぜ文学を読むことやそれについて書くことが「自己の他者化」になっていくのか、そのことと文学の力はどこで接近し、交差するのか。以下、『文学力』をたどりながら、考えてみたい¹。

1. 文学が持つ力

『文学力』に収められた論文は、第四章を除いては2000年代、そしてその多くが2001年の同時多発テ

ロ以降に書かれたものである。2000年代の竹村さんは、ジュディス・バトラーの『アンティゴネーの主張』の翻訳出版（2002年）、『触発する言葉』の翻訳出版（2004年）を果たし、さらに『“ポスト”フェミニズム』（2003年）を編纂し、政治的な関心とその仕事に目立っていた時期でもある。このことは、没後、文学に特化しない論考を集めた論文集『境界を攪乱する——性・生・暴力』（2013年）が編まれ、しかもそこに収められたものがすべて2000年代に発表されたものであることに如実に表れている。『文学力』に収められた論考は、これらの仕事と共振しながらすべてフェミニストとしての立ち位置を表明しつつ、フェミニストであるからこそ見えてくる今日的な問題——ファミリーやテロリズム——に、文学の読みから迫ろうとする試みである。

第Ⅰ部は、ポストファミリーというまなざしに貫かれた3編からなる。そもそも孤児（第一章）や婚外子認知（第二章）や正当と認められる親族関係（第三章）が物語のなかで「問題」となるのは、規範的な家族が、職場という生産の場所とは切り分けられて、命や労働力の再生産の場として、近代に現れた資本主義を支えるシステムとなってきたからである。女たちが、あるいは女たちの位相が、「男たちの公的空間を保管するために……私的空間の換喩として機能すべく動員される」とき、「私的」な親族関係が、「公的」な社会を背後から支えるための必要不可欠な「公的」装置」となり、結果として近代は「血縁至上主義ファミリー」の時代となるのである（竹村 2012、p.47）。

第1章「母なき娘はヒロインになるか——孤児物語のポストファミリー」は、19世紀アメリカ文学における孤児をヒロインにした物語の分析である。近代化の途上にあるアメリカ社会において、男女の性別二元論と相互に強化しあう男女の領域分化の思想は、結婚して近代家族を創設することを物語のゴールとするようなセンチメンタルな家庭小説として生産され、流通していた。しかし、そのような制約のなかであって、作品によっては、こうした性別二元論と、それを元にした近代家族像が、たとえば濃密なシスターフッド表象を通じて密かに切り崩されている。ただしこの章における分析は、表層に現れたプロットや象徴というよりはむしろ、編集上の制約との交渉のなかで、それぞれの作品が抱えたプロット内のジレンマ、しかもそれが安直な物語展開として表面化している点からおこなわれる。つまり、「攪乱的要素と、ジャンルに期待されている規範追従の要素は、ベストセラーという大衆受けする形式のなかで、レトリカル・ジレンマというよりも、プロット上のジレンマに変換され」（竹村 2012、p.36）ている点に着目するのだ。むろん、それが「文学的強度」（竹村 2012、p.36）を弱めているとしても、逆にそのジレンマや安易さが逆照射してしまうものこそ、女が階級、人種、国家といった力関係のなかで構築されるという性質を浮き彫りにする。

第二章「子どもの認知とポストファミリー——「パールの使命は果たされた」のか？」は、第一章と同様、子どもの位相と近代家族の生成という見地から、ナサニエル・ホーソーンの『緋文字』を再読する試みである。ヘスターとディムズデイルのあいだの許されない関係の結果生まれた娘パールは、父から認知されていない非嫡出子としてのみならず、社会の周縁にとどまっているという意味では「象徴的父を欠いた存在、いまだに象徴界の敷居に佇んでいる前＝言語的な存在」（竹村 2012、p.54）としても二重に他者化されている。それが意味するのは、パールが、父・母・子のエディプス関係を基盤とする社会制度の構築性やその権力を可視化し続ける存在であるということである（竹村 2012、p.54）。また、このような他者性を突きつけられ続けるディムズデイルも、ヘスターの夫（だが、そのことを隠し続ける）チリングワスも、それぞれの思惑ゆえに言葉に出さずお互いに密やかに繋がり続ける。チリングワスが、さながらディムズデイルの「象徴的父」のような機能を獲得するために、チリングワスの妻へ

スターと、象徴的には息子となるディムズデイルの姦通は、エディプスのごとく母と息子の近親相姦にもなりうるし、またディムズデイルとチリングワスのあいだもクィアとも取れる共棲関係を結んでいるという点で、これらの主要登場人物は、幾重にも「近代家族の語彙を混乱させるクィア・ファミリー」（竹村 2012、p.57）である。パールがここではない他のどこかで豊かに幸せに暮らしていると書かれていることにより、物語の現在は「婚姻制度と実子偏重の親族関係によって構造化されるのではない新しい親密圏」（竹村 2012、p.70）の到来をいまだ待つ場であるとする指摘は、既存の親密圏の構築性をあらわにする。

第三章「親族関係のブラック／ホワイトホール」は、同様の問題意識からウィリアム・フォークナーの『アブサロム、アブサロム！』を読み解く緊密かつ濃厚な、そしてその緊密さゆえに要約を拒むような論考である。一族を創設し、その「父」たらんとしたサトペンという男の野望の挫折を、その息子ヘンリー、娘ジュディス、および息子とされるチャールズ・ボンの錯綜した愛、言い換えれば親族関係の挫折として読み解くとき、この物語は近代の性の力学のテキスト化という相貌を見せる。この三人の関係のなかでも、とくにボンとヘンリーの関係——同性愛的な関係であると同時に兄弟間の愛、なおかつ異人種間の愛でもある——は、父の禁止の言葉が引き金となって顕在化する。このように物語を駆動するしくみを読み解く議論から引き出されるのは、「性関係と親族関係を連動させる解釈枠がまず存在しており、その解釈枠によって、性対象となる人物の属性が社会的につくられるということ」（竹村 2012、p.81）である。また、その際にボン自身がみずから語る「ニガー」という言葉は、そもそもサトペンの思い描いていた白人の父を父祖とする家系創設の夢を瓦解させるブラックホールのごとき消失点となる。竹村さんはここから、対照的な関係をサトペンの白人家系創設の犠牲者でもある女たちが創り出すあらたな姉妹のごとき関係——「全知の愛」を持つと自称するローザがブラックホールに飲み込まれながらも、親族関係の法を攪乱しうる「血縁関係を中心化する従来の親族関係ではなく、拡大家族を構成する親密性のエロティシズム」として、近代家族を解放し得るホワイトホール（竹村 2012、pp.94-5）——のなかに、希望の曙光を幻視する。

第Ⅰ部同様、第Ⅱ部においても、親族関係に、おもにセクシュアリティという点から光を当てる。レズビアン・パルプフィクションの分析（第四章）や、ヴァージニア・ウルフの『ミセス・ダロウェイ』とロビン・リピンコットの『ミスター・ダロウェイ』を重ね合わせて読む間テクスト的な解釈（第五章）を通じて、近代的な家族がいかに異性愛主義に貫かれ、そうでないセクシュアリティを、ともすれば認識不可能な域に追いやりかねないのか、しかしながらいかに、そうした場に異性愛の家族制度ではないあらたな親族関係がおぼろげながら想像され得るのかが示される。

文学に特化した分析を示すⅠ、Ⅱ部からあらためて感じるのは、竹村さんがフェミニストとして培ってきた理論とその視点があってこそあらたに姿を現す何かがあるという点である。たとえば第五章は、二編をつき合わせたときにはじめて、規範的セクシュアリティが、いかにわたしたちに沈黙を強い、ひいてはテキストに沈黙を強いているかという可能性が浮かび上がる点で、間テクスト的解釈という方法論なしには不可能な読みである。また、ホーソーやフォークナーのテキストの分析を支えるのは、ラカンの理論、あるいはまたバトラーがアンティゴネーをめぐるおこなった考察である。家族関係とは、なにより象徴界という言語の父の《法》としてあらわれ、また国家の法がそれを可視的な制度にする。しかもそれは「位置」の相関関係によってそうなるので、『緋文字』のように、ひとりの人物が複数の位置を占める可能性がある場合はもちろんのこと、女や子どもが＜家庭／^{ファミリー}家族＞のなかでの位置を

めぐる語彙で表しきれない場合にも、その図式そのものを揺るがしかねない。またフォークナー作品における近親相姦と同性愛、および人種という観点も同様である。それらは、象徴界にかかわることであるからには、承認し得ない関係性は、テキストという言語の世界の「敷居に佇んで」（竹村 2012、p.54）いるはずであり、理論的な思考と分析は、ひとつひとつの関係性をつまびらかにし抜いたとき、その言葉にし得ぬなものかの存在を、あるいはその可能性を照らし出すことを可能にする。

それにしても、まだ見ぬ関係の、あるいはいまだ言語化し得ない関係の幻視の可能性を見出し、敢えてそのことを言葉にしていこうとするその志向性をどのように考えたらいだろうか。なぜ、執拗なまでにポストファミリーにこだわらねばならないのか。竹村さんの2000年代の仕事を位置づけようとするなら、彼女がその独自の言葉遣いで表した「“ポスト”・フェミニズム」の問題を考えなければならない。そのことがまた、「テロリズム」という言葉が登場するⅢ部を考えることにも、また『文学力』の副題を理解することにもつながるだろう。

2. “ポスト”・フェミニズムのまなざし——ファミリー・欲望・テロリズム

90年代の理論は、近代の性の体制が、親密性を異性愛の核家族に限定し、そのなかで主体や身体の把握もおこなわれてきたということを暴いたが、わたしたちの現実はさらにそれを超えた相を、すなわちそれまでの語彙と解釈枠組みでは捕捉できない相を見せるようになってきた。それはフェミニズムにも及んでいる。アンジェラ・マクロビー（Angela McRobbie）はこのことを「予想もしなかったことが起こった」（McRobbie 2009, p.1）と言う。マクロビーにとって予想しなかった事態とは、フェミニズムが推進してきたエンパワメントや選択の自由といった考え方が、女という集団ではなくて、「個人的な言説」へと、しかも消費活動へとずらされ、フェミニズムの「代用品」として新自由主義的な自己責任と個人の自由の物語として再占有されているという事態である（McRobbie 2009, p.1）。このことを考えるには、数年前にブームを呼んだベストセラー『負け犬の遠吠え』を思い出してもいいかもしれない。あの本のなかで負け犬を自認する独身女性が趣味やお稽古ごとを楽しめるのは、男女雇用機会均等法で勝ち組となった女に限定されている。自立した女は消費主体として、あるいは消費の自由を享受する主体として提示されている。そのことは同じ年に出版された小倉千加子の『結婚の条件』で取りあげられる低所得の女たちと重ねてみれば明らかである。自由は、財力に左右されるのだ。そのことは、たとえば、生殖技術が自由であるとしても、実は個人の財力の差でその自由の行使ができたりできなかったりすることを考えてみればよいだろう。竹村さんが『アンティゴネーの主張』巻末論文で挙げっていたさまざまな関係の生存可能性の承認も、このような事態と隣り合わせなのだ。

他方、2001年9月11日の同時多発テロ、またそれに引き続いて起こったイラク戦争のさなかアブグレイブ収容所において女性兵士までもが囚人を虐待した事件などを目にするにおよび、竹村さんの議論は暴力やグローバル化を問題にするようになる。このような従来とは違うと思われる暴力を、竹村さんは「社会の形質変化」（竹村 2013a、p.361）、すなわち近代の性の体制とセットになっていた政治経済システムの変容の徴候として捉えている。この変容とともに、性の体制が再度抑圧されたり不可視化されたりしはじめ、あらたな暴力も出てくるというのである。このことをアンソニー・ギデンズとウルリッヒ・ベックおよびスコット・ラッシュの言うように「再帰的近代」と呼ぶのか、あるいはピーター・ドラッカーのように「ポスト資本主義社会」と呼ぶのか、それとも「新自由主義」と呼ぶのか、呼称はと

もかくとして、竹村さんは、政治経済システムの現在を変容したものと捉えている。この状況下で、あるいはこの状況下であるから、「資本と欲望の自己増殖が、身体の自律性という近代の幻想を（たとえば臓器移植や美容整形をとおして）字義通りに有名無実にしていき」、バイオポリティクスはますます精緻に強力になり、単に生きることを管理するのみならず、その「致命的相貌」がむしろ露わになると指摘する（竹村 2013b, p.232）。ジョルジョ・アガンベンを援用しながら竹村さんが述べるのは、今やバイオポリティクスは、これまでは生きるに値していた市民すら、生きるに値せず悼まれることのない生としてのホモ・サケルにいと簡単に転化させる、「死の政治」（竹村 2008, p.248）と化して行くという認識である。アブグレイブのアメリカ人女性兵士が、その虐待行為が明るみに出たとたんに市民の位置からホモ・サケルへと転落するエピソードはそのことを雄弁に物語る。今やバイオポリティクスは「生政治」ではなく「死の政治」へと変質している。しかし、そのようにホモ・サケルへと簡単に転落する「市民かつホモ・サケル、殺害者かつ被殺害者となる」存在は、「収容所看守、空港職員、臓器移植をおこなう医師といった、社会権力を何らかのかたちで付与されている者」だけではない（竹村 2008, p.250）。むしろ現代社会が、「より良き生」を拡大させようとすればするほど、それは「剥き出しの生」の抹消に向かうが、そのような「より良き生」として「主体化／^{サブジェクシオン}従属化」を進めるほどに、主体は「市民かつホモ・サケル」へと転じていくのだとしか思えない暴力的な行為に向かっていくメカニズムが働いているのではないか（竹村 2008, p.250）。

こうした問題関心に踏み込もうとしたのが共編著『“ポスト”フェミニズム』である。ここで確認しておきたいのは、彼女が「ポスト」に敢えて引用符をつけることに何を賭けたのか、ということだ。先にも紹介したが、マクロビーによれば、（マクロビーはこうしたあり方に反対だが）フェミニズムのアジェンダはすでに達成されたからにはもはや「イズム」として言挙げする必要はないだろうという考え方が、一般的なポスト・フェミニズムである（McRobbie 2009, p.1）。竹村さんもこのようなポスト・フェミニズムには違和感を表明し、編著『“ポスト”フェミニズム』に寄せた文章「「いまを生きる」“ポスト”フェミニズム理論」において、「「ポスト」の意味は、まえの時代と重なり合いながら、まえの時代を自己批判的に、自己増殖的に見る視点」であり、さらに以下のように警鐘を鳴らしたうえで、「ポスト」をけっして「その後」や「終わった」のではないフェミニズムを表すものとして使うことを表明している。

フェミニズム運動が理論によって提示されている自己批判性を無視するなら、表面上は女の解放が達成されつつあるように装われているニューエコノミーの時代にあって、“ポスト”フェミニズムは、自己参照性という「ポスト」の役割を失い、「その後」という意味に転落していくだろう（竹村 2003, p.107）。

おそらく、ここで「ニューエコノミー」と竹村さんが呼ぶ体制が、フェミニズムのありようと密接に絡んでいる。それは、端的に言えば現在のグローバル化と新自由主義のエコノミーのことだろう。かねてよりアイデンティティの政治の危険性に警鐘を鳴らしていたナンシー・フレイザー（Nancy Fraser）は、端的に第二波フェミニズムが、はからずもこのあらたな危機を用意することに手を貸したと指摘している。福祉国家を批判することによって、「連帯がなくなり、グローバル化、新自由主義化」することに貢献してしまった。男性を一家の稼ぎ手とするような家族給を支えるような福祉国家体制を批判

し、階級闘争よりは個人を志向したことにより、みずからをも流動化した労働資源とし、あらたなる格差の出現を後押ししたというのである（Fraser 2013）。

このようなエコノミーの社会がいかにして「死の政治」の場となるのか。三浦玲一は、この新自由主義状況のことを、フレドリック・ジェイムソンを援用しつつ「ポストモダニズム」と呼ぶ。ここで重要なのは、この「産業・社会・経済構造の根本的な変容」が福祉国家批判を梃子にされてきたということであり、第二波フェミニズムは、そもそも男性の稼ぎ手を中心とした核家族という性差別を制度化した福祉国家から「予め排除」された者を代表することを目指す点において、新自由主義と親和的であったという点である。三浦は、マクロビーに依拠しながら、このような新自由主義において、自己肯定的な消費主体として表象される解放された女たちが、実のところ「自傷行為」と裏表の関係であるとする点から、「福祉国家の性差別が福祉国家の生存権の保証と表裏一体であったことを」看破する。つまり、第二波フェミニズムが新自由主義と共振するとき、その「福祉国家の批判は、その制度的な性差別の撤廃と同時に、それと表裏一体の関係にあった、生存権の保証を手放してしまった」のである（三浦 2013, p. 20）。「死の政治」とはそのように理解される。

2000年代になって、竹村さんが暴力の問題に踏み込んだ議論は一見してフェミニズムから離れたように見えながらも、今述べたような問題意識の在りようからすれば、依然としてフェミニストとしての関心から書かれていると言ってよいだろう。上述したように、性体制の変化が欲望の再配置にも直結するからには、暴力と欲望、そして欲望とファミリーの想像力は不可分のものだ。であるからこそ、フェミニズムは、今こそ、このような政治、経済、社会、そして文化に応答せねばならないのだ。とくにバイオポリティクスの問題を考えると、竹村さんはアブグレイブの兵士のような例のみならず、佐世保で起こった小学生による同級生殺人事件もとりあげながら、わたしたち自身の「主体化」のありかたが変容した問題として捉えている。それは、フェミニズムの主張自体が「社会の形質変化」の一翼を担っていたからこそ、また主体化が性差を軸に配備された欲望を介して成り立っていたことを見据えてきたからこそ、フェミニズムはこのあらたな徴候に敏感にならざるを得ないということだろう。

『文学力』の副題が、「ファミリー・欲望・テロリズム」であり、第Ⅲ部が、テロリストやテロリズムをキーワードとしているのはこのような文脈においてである。第六章は、ヘンリー・ジェイムズの『カサマシマ公爵夫人』におけるテロリストをめぐる論考だが、テロ集団に属しつつも規範からずれた青年ハイアシンズと公爵夫人とのあいだでの、未完には終わるが、別の身体と親密圏が想像・創造され得ていた可能性を、むしろその未完という状態に読み込んでいく。グロリア・アンザルデュアの複層的な語りを諸力の戦いとして読み解く第七章に続く第八章は、テロリズムの表象可能性をめぐる論考である。ドン・デリーロの『マオⅡ』（1991）とマイケル・カニンガム『星々の生まれるところ』（2005）を扱うこの章で問われるのは、テロリズムに否応なしに向かい合わされる時代に、表象はテロリズムに対抗し得るのかという、文学の力を問う問いである。議論の前半でまず確認されるのは、9.11のスペクタクル惨事がハリウッドの映画を見るかのような既視感を呼び起こしたことは、芸術家もテロリストも、ともに「芸術の独自性」や「感性の個別性」といった近代の信仰が浸食されている複製文化のなかに」いたのであって、個人の想像力と集団の想像力の二分法は、すでに破壊されていたという身も蓋もない状況である（竹村 2012, pp. 187-89）。そのような状況を生きる『マオⅡ』の主人公である作家の書く物語は、テロリストと人質を区別できず、最終的には作家自身もみずからを破壊してしまうという意味で「自己参照的な自爆小説」（竹村 2012, p. 192）となり、その際にテキストの「残余」として、「死と暴

力と破壊」をそこに残す（竹村 2012、p. 206）のに対して『星々の生まれるところ』は、暴力に対抗するにあたり、テロリズムが未来に恐怖を投げかけるその時間性と同様、未来への時間を物語化しようとする物語であると論じられる。（元）テロリストの少年と生きる主人公の物語には、デリダ的な「歓待」の物語が潜む。Ⅰ、Ⅱ部同様、第Ⅲ部にも共通するのは、言語で構築された物語が、いまだ現れてはいない何かを、あるいは言い切れぬ残余を示唆する瞬間を希求する読み手の態度である。

3. フェミニストの文学研究

文学に何を求めるのか。あるいは文学の力とは何なのか。第Ⅳ部は、フェミニストとして文学を読み、研究すること、そして、そもそも何故文学を読むのか、ということをめぐる議論が並ぶ。わけても、第九章「虎穴に入れば……——〈フェミニズム・文学・批評〉」は、フェミニストとして「文学」を読む意義を前面に押し出す論考である。もちろん、本論の最初の節でも述べたように、竹村さんの批評の論理と言葉は、作品に「まだ見ぬなにか」をあぶり出すが、その「まだ見ぬなにか」を胚胎しうるところが、おそらく文学の力である。そしてそれは、レトリックや比喩的表現を通じておこなわれる。なぜならそうした技法は、えてして、そこにはない何か、あるいはそこには言われていない意味を指し示すからである。言語で構築された文学作品は、修辭的であるがゆえに、既存の象徴秩序を「錯乱させ」、それによって「いまだ見ぬもの、いまだ見ぬ正義を未来に向けて現実化する」（竹村 2012、p. 237）という意味において政治的であり得る。そのような文学は、言い換えれば「現実の象徴秩序を穿つ政治性を秘め」る「詩的事件」（竹村 2012、p. 238）である。

そうであるなら、そうした文学の技法のみを重視した形式批評にとどまるのは、内容の価値判断をおこなわないという点で、むしろ既存の価値観に与するものであり、かといって、ド・マンの影響下でヒリス・ミラー（Hillis Miller）が主張したような、テキストの統一を裏切るような修辭作用を引きうける倫理もまた、その「事件」を引きうけないからには、「なぜこのテキストをいま読むのか、読まざるをえないのかという、読者の切迫した状況」を回避したものでしかない（竹村 2012、p. 226）。なぜなら、「象徴をそれ以上還元不可能にさせているもの」、つまりは「詩的事件」の力を抑圧しようとするものは、「身体性に裏付けられた性的差異」（竹村 2012、p. 239）であるからには、文学言語の象徴機能が、レトリカルに日常言語を裏切る、あるいは亀裂を生じさせる場に、現実の象徴秩序を揺るがす可能性を見出すことこそが、フェミニストの立場表明をも含めた切迫した読みとなるはずだからである。

このように考えてくるときに、なぜ、『文学力』のⅠ～Ⅲ節に収められた論考がいまだ到来せざるものを幻視するヴィジョンを読み取り、またそれをわたしたちの前に提示してきたのか、その意味が明らかになる。そしてそうした可能性は、象徴機能を揺るがすがゆえに、みずからをも揺るがす事件として我が身を襲う。この切迫した読みこそが——「我が身の真の誕生としての我が身の死を行為遂行的に望むという意味で——まさに生と死が修辭をつうじて交差する象徴の場に進んで身を投じるという意味においてのみ——倫理的批評」（竹村 2012、p. 241）と化す。そして、その批評が成立するとは、第十一章でガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァクを援用しつつ示されるような、みずからの他者化を伴う作業なのだ。その経験は、まさしく「アイデンティティの中断」（竹村 2002、p. 259）であり、他者を迎える批評に——別様に言えば、『愛について』の最終章で提示されたような「翻訳の残余」に対峙する正義となるだろう。文学という言語の構築物に対峙するこの苛烈なる倫理的な姿勢は、言語的に存

在する「わたし」の中断を介した人と人とのあいだの応答責任という倫理、あるいは翻訳の倫理を導きだす。そして、そのように主体が主体としてのかたちを取るや取らぬやのあわいを再度問い直すことが、現代の暴力、あるいは暴力の主体の検討へと地続きになっているのだ。このような批評的態度を目にしたときに、そこに理論と「わたし」の橋渡しを、その「わたし」をはぐくみ、想像し、想像させられる社会的なものをいかに認知し、いかに語るのかと粘り強く問い続ける意志を——理論をみずからの身体そのもの、言葉そのものとして紡ごうとする意志を——見て取らないではいられない。

『文学力の挑戦』は、『境界を攪乱する』あるいは『彼女は何を視ているのか——映像表象と欲望の深層』（2012年）とともに、竹村和子というフェミニストのアクチュアルな問題関心の表出であると同時に、文学研究が困難な社会における文学（研究）の意義を再度言挙げする書である。文学は現実を変え得る修辞の場である限りにおいて、現実挑戦する力を秘めている。そして文学を読み、その読みを言葉で紡ぐことは、現実挑戦し、それを変えようという意志と不可分である。新自由主義、グローバル化といった社会状況のなかでの「ポスト・フェミニズム」状況や、「死の政治学」を問題視するなら、わたしたちもまた、わたしたちが生きるこの社会状況に想像的・創造的に介入する契機を秘めた文学を読むための想像力を、読みながら、批評しながら、養わねばならない。スピヴァクの言う「美学のトレーニング」、すなわち「認識のパフォーマンスをするために想像力を鍛える」（Caruth 2010, p. 1022）ことを、しなければならない。文学作品の中において変革の契機となる象徴の裂け目を、あるいはいまだ到来していない何かを、幻視しつつ、自己の他者化を引きうけながら。今、必要なのは、おそらくこのような態度を、我が身に引きうけることである。

（おち・ひろみ／一橋大学商学研究科教授）

註

1. 本論考は、『アメリカ文学』第74号（2013年）7-14頁に収録されている拙論「書いて生き、書いて進むこと」と重複する部分があることをお断りしておきたい。なお、この号では竹村和子さんを追悼して、2012年6月、日本アメリカ文学会東京支部月例会で開かれた「竹村和子さんの仕事——検証と継承」題されたシンポジウムの発表を文章化した特集が組まれており、上記拙論はそのひとつであり、また本論考において引用されている三浦玲一の議論も同じ特集のものである。その他折島正司氏による竹村さんの思索に触れる文章、小林富久子氏による『文学力の挑戦』のかなり詳細な紹介、小谷真理氏による当事者性議論などが収められている。

引用文献

小倉千加子『結婚の条件』朝日新聞社、2003年。

酒井順子『負け犬の遠吠え』講談社、2003年。

竹村和子『愛について——アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店、2002年。

———.『"ポスト"フェミニズム』作品社、2003年。

———.「生と死のポリティックス——暴力と欲望の再配置」竹村和子編『欲望・暴力のレジーム——揺らぐ表象／格闘する理論』作品社、2008年。

———.「『戦争の世紀』のフェミニズム」『境界を攪乱する——性・生・暴力』。岩波書店、2013年a。

———.「生政治とパッション（受動性／受苦）——仮定法で語り継ぐこと」『境界を攪乱する——性・生・暴力』岩波書店、2013年b。

三浦玲一「リスク社会化と『ポスト』フェミニズム」『アメリカ文学』第74号（2013）：pp. 15-25.

Caruth, Cathy. "Interview with Gayatri Chakravorty Spivak." *PMLA*. 125.4 (2010) : pp.1020-25.

Fraser, Nancy. "How Feminism Became Capitalism's Handmaiden—and How to Reclaim It." 14th Oct. 2013. *Guardian*. 18th Oct. 2013<<http://www.theguardian.com/commentisfree/2013/oct/14/feminism-capitalist-handmaiden-neoliberal>>.

McRobbie, Angela. *The Aftermath of Feminism: Gender, Culture and Social Change*. London: Sage Publications, Inc. 2009.